

大交易・大交流の時代

ユーラシア大陸の広範な部分を統合したモンゴル帝国は14世紀に解体したが、15世紀末以降、アメリカ大陸をも含む地球規模での新たな「世界の一体化」の動きが始まった。

Q▶「世界の一体化」が加速した背景と、その進行による諸地域の変貌はどのようなものだったのだろうか。

アジア交易世界の興隆

Q▶「世界の一体化」が始まった時期に、アジアではどのような動きがおこっていたのだろうか。

モンゴル帝国 解体後のアジア

Q▶ モンゴル帝国の解体後、アジア各地にはどのような勢力が生まれたのだろうか。

14世紀になると、ユーラシア全域で飢饉や疫病、およびそれにとまなう政治変動が広がり、モンゴル帝国は解体していった。14世紀後半のアジアでは、チャガタイ＝ハン国の分裂抗争のなかから力をのばして中央アジア・西アジアに広大な領土を築いたティムール朝と、元朝を北方に駆逐して中国で支配を確立した明朝とが、2つの大帝国として成長した。また、ティムール朝の西方ではオスマン帝国が勢力を拡大しつつあり、明朝の北方では中国本土から退いたモンゴルが勢力を保っていた。

日本では鎌倉幕府が倒れて南北朝が対立し、政治の混乱とともに倭寇の活動が活発化していたが、14世紀末に南北朝の合一が果たされた。元に服属していた朝鮮半島の高麗でも、親元派と反元派の対立が続いたが、倭寇を破って名声を高めた李成桂が、高麗を倒して朝鮮王朝を建てた。こうして14世紀末の東アジア諸地域では、新しい政治秩序が一応の安定に至った。

明初の政治

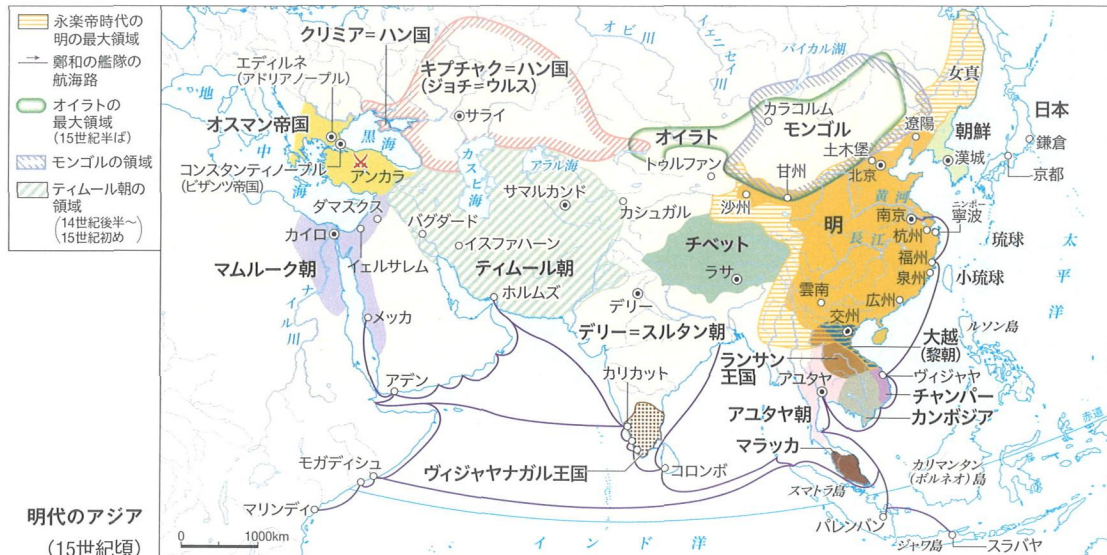
Q▶ 明朝初期の国内統治には、どのような特徴があったのだろうか。

元末の中国では、白蓮教徒による紅巾の乱をきっかけに群雄が蜂起した。反乱のなかで頭角を現した貧農出身の朱元璋は、儒学の素養をもつ知識人の協力を得て勢力をのぼし、1368年に南京で皇帝の座につき(洪武帝、廟号は太祖)、明朝を建てた。明軍に追われた元の帝室は、モ

①白蓮教は仏教的要素の強い民間の宗教結社で、宋代に始まり、元末には、弥勒仏が救世主としてこの世に現れるという信仰と結びついて勢力を拡大した。

②明代以後は一皇帝一元号(一世一元)としたため、「洪武帝」のように元号で皇帝を呼ぶことが多い。廟号とは死後に贈られる名的一种。

六部を皇帝に直属させて万事を皇帝が直接決定する体制をつかった。



ンゴル高原で王朝を維持した。
→p.148

洪武帝は、元代に政治の中枢を握っていた中書省を廃止して皇帝に権力を集中させた。また、農村では人口調査を全国的

におこなって租税や土地の台帳を整備したほか、里甲制^③を実施し、民衆教化のため6カ条の教訓(六諭^④)を定め、農村の末端にまで統制をおよぼして民生の安定をはかった。官制・法制的面では、朱子学を官学として科挙を整備し、唐の律・令にならって明律・明令を制定した。軍政の面では、一般の民戸と別に軍戸の戸籍を設けて衛所制^⑤を整備した。北方の辺境には、洪武帝の息子たちが王として配置され、対モンゴル防衛を担った。

洪武帝の死後、位を継いだ建文帝は諸王勢力の削減をはかったが、北平(北京)を本拠とした燕王はこれに対抗して挙兵し(靖難の役)、南京を占領して帝位についた(永楽帝)。彼は北京に都を移し、みづから軍を率いてモンゴル高原に遠征するなど積極的な対外政策をとった。また、ムスリムの宦官鄭和に命じ、大艦隊を率いてインド洋からアフリカ沿岸まで数回の遠征をおこなわせた。

租税台帳である賦役黃冊や土地台帳である魚鱗圖冊が作成された。



洪武帝 現在残る洪武帝の肖像画は、温厚な帝王像(左)と、あごが長く目がつりあがった異形の肖像(右)との2種類にわかれている。朱元璋が特異な容貌の持ち主であったことは史料にもみえ、異形の方が本物に近いといわれている。

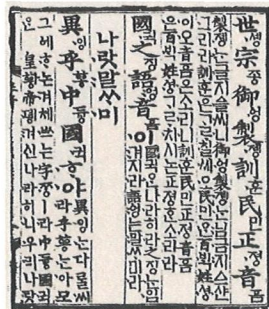
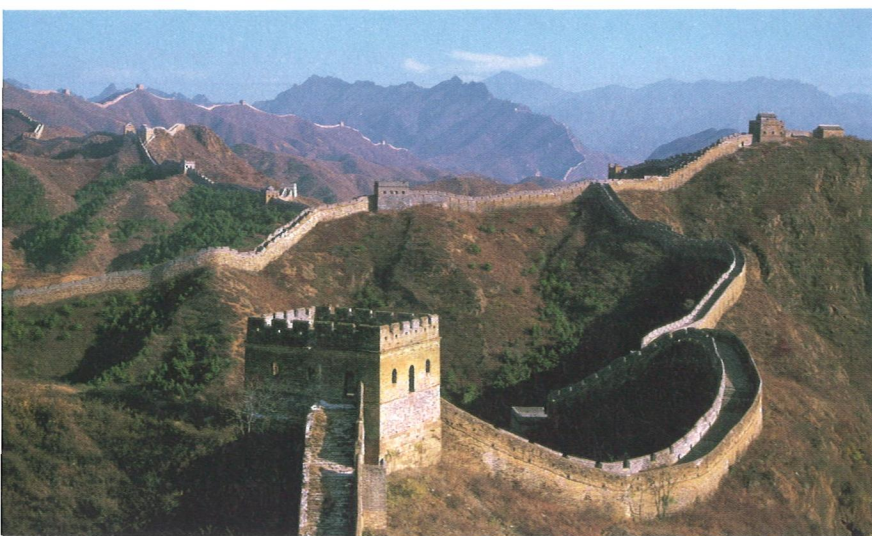
③ 110戸を目安に1里を構成し、財力ある10戸を里長戸として、残り100戸を10甲にわけ、10年一巡の輪番で里甲内の徴税事務や治安維持に当たらせた。また里内の人望ある長老を里老人とし、里内の裁判や教化に当たらせた。

④ 「父母に孝順なれ、目上を尊敬せよ」などの内容で、里老人にとなえさせた。

⑤ 112人で百戸所、10百戸所で千戸所、5千戸所で1衛を編制した。



鄭和艦隊の航海図



訓民正音(ハングル) 訓民正音は母音と子音とを組み合わせせた、合理的な表音文字である。

万里の長城 現在残る長城は、明代後期に修築されたものである。中国、北京郊外。

明朝の朝貢世界

▶ 明との朝貢関係は、諸地域にどのような影響をもたらしたのだろうか。

14世紀に前期倭寇の活動が活発になったことも要因。◀

明朝は、国内統治と同様、対外関係においても強い統制政策をとり、民間人の海上交易を許さず(海禁)、周辺諸地域とのあいだで朝貢関係を結んで、政府の管理する朝貢貿易を推進した。15世紀初めに中山王によって統一された琉球(現在の沖縄)は、明との朝貢貿易で得た物資を用いて東シナ海と南シナ海を結ぶ交易の要となった。14世紀末頃マレー半島南西部に成立したマラッカ王国も、鄭和の遠征をきっかけに急成長し、インド洋と東南アジアを中継する位置を利用して、マジャパヒト王国にわかる東南アジア最大の交易拠点となった。合格者は、のちに両班が独占した。→P171

明の重要な朝貢国であった朝鮮は、科擧の整備や朱子学の導入など、明の制度にならった改革をおこなった。15世紀前半の世宗の時代には、金属活字による出版や訓民正音(ハングル)の制定などの文化事業もおこなわれた。日本では、遣唐使の停止以来とだえていた中国への正式な使節派遣が復活し、室町幕府の足利義満は、15世紀初めに明から「日本国王」に封ぜられて勘合貿易を始めた。ベトナムの黎朝も、明と朝貢関係を結び、明の制度を取り入れ、朱子学を振興した。

北方では、明の物産を求めていたモンゴル諸集団が、朝貢貿易における使節派遣の回数や規模の制限を不満として、しばしば中国に侵入した。15世紀半ばには、オイラトが強大となり、明の皇帝を土木堡で捕らえ(土木の変)、北京を包囲した。この頃から明は対外的に守勢に転じ、長城を改修して北方民族の侵入に備えた。

この諸集団はタタールと呼ばれ、アルタン=ハンに率いられたタタールはしばしば長城をこえて侵入し、1550年には北京を包囲した。

①元朝直系のクビライの子孫が絶えたのち、モンゴル高原では、東部のモンゴル諸集団と西部のオイラトとが勢力を競った。オイラトは、チンギス=カン家と代々通婚関係を結んでいた有力な遊牧民族集団であった。

交易の活発化

Q▶ 世界的な商業の発展は、明の朝貢体制にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

16世紀に入ると、東南アジアではコショウなど香辛料^{こうしんりょう}の輸出が急激に増大した。その一因はアジアの富を求めるヨーロッパ勢力の進出であり、これによりアジア諸地域は、大陸をこえた大規模な交易・交流の舞台となった。なかでもポルトガルは、大砲や鉄砲などの強力な火器^{かき}②を備え、16世紀初めにマラッカを占領した。しかし、ムスリム商人はスマトラ島やジャワ島に新たな交易の拠点をつくり、ポルトガルに対抗した。明の朝貢体制のもとでは、マラッカや琉球のように領土の小さな国も中継貿易で栄えることができたが、競争の激化とともに、特産品を生み出す広い後背地^{こうはいち}と強い軍事力をもつ国が交易の主役となっていった。

② 火器は中国起源(→p.143)だったが、15世紀にヨーロッパで改良され、大きな威力をもつようになった。

Q▶ この史料は、明の官僚で対外問題にも詳しく鄭曉が記したものである。鄭曉は、倭寇の活発化の原因をどのようにとらえているだろうか。また、どのような対策をとるべきだとしているだろうか。

鄭曉『今言』(1566年)

近年の東南地域の倭寇^{わこう}には、おおむね中国の人が多い。力が強く胆力もあり、知恵もある者は往々にして賊となる。……彼らは荒々しく勇敢であるが、出世の手段もなく生計の道もないため、よほど道徳的な人間でなければ苦しい生活には我慢できず、暴れまわって気を晴らそうとするのである。そこでこっそり故郷を離れ、異民族に寝返る。倭奴^{わん}[日本人の蔑称]は華人を耳目^{じもく}[情報源]とし、華人は倭奴を爪牙^{そうが}[実行部隊]とす

る。……まして中国と外国とのあいだで交易をおこなえば、生産地と購買地のあいだでは品物の価格が大きく異なり、数倍の利益が得られる。いまこれを禁止しようとしても、なんとかして交通しようとし、利益の道がふさがれれば反乱の発端が開かれ、たがいに誘い合って叛徒は日ごとに増加するだろう。現実的な寛容政策をとらなければ、数年後に大きな反乱がおり、手の付けようもなくなるだろう。(著者訳)



『倭寇図巻』 中国沿岸での倭寇の略奪を中国側から描いた絵巻。図は、倭寇(右)と明軍(左)が船上で戦っている場面。

Q▶ 明側と倭寇側の服装の違いがわかる、当時の中国人による「日本人」のイメージはどのようなものだろうか。

①当時モンゴルを統合したア
ルタン＝ハーン(1507頃～82)
は、しばしば長城をこえて侵
入し、1550年には北京を包圍
した。

②16世紀の倭寇を後期倭寇と
呼ぶのに対し、14世紀の倭寇
を前期倭寇という。

③16世紀半ば、日本の種子島
に鉄砲を伝えたポルトガル人
の乗ってきた船も、王直のも
のであったといわれる。

④宋代には長江下流域が穀倉
地帯として成長し「蘇湖(江浙)
熟すれば天下足る」(→p.141)
と称せられたのに対し、明代
後期には「湖広熟すれば天下
足る」といわれるようになった。

⑤科擧の合格者や官僚経験者
は、郷里の名士として勢力を
もった。このような人々を郷
紳という。



糸くり 『天工開物』に描かれ
た糸車。足踏み式で車をまわ
し、繭から糸を巻き取ること
ができるようになっている。

16世紀半ばに中国の周辺では、北方のモンゴル^①や東南沿岸の倭寇^②
の活動が激化して明を苦しめたが(北虜南倭)、それは交易の利益を求め
る人々が明の統制政策を打破しようとする動きであった。その動きには、
モンゴル人や日本人のみならず、多くの中国人が加わっており、日本の
五島列島などを拠点に活動した中国出身の王直^③は、倭寇の有名な頭目
の一人であった。

このような状況に直面して、明は従来の交易統制政策を緩和し、モン
ゴルとのあいだに交易場を設けるとともに、海禁をゆるめて民間人の海
上交易を許した。その結果、当時急速に生産をのぼした日本の銀、つい
でアメリカ大陸のスペイン植民地で採掘された銀が大量に中国に流入
した。民間交易の活発化とともに、東アジア・東南アジアにおける明の
権威は弱まって朝貢体制は崩壊に向かい、貿易の利益を求める勢力がそ
の軍事力を背景に競争する実力抗争の時代となった。

明代後期の 社会と文化

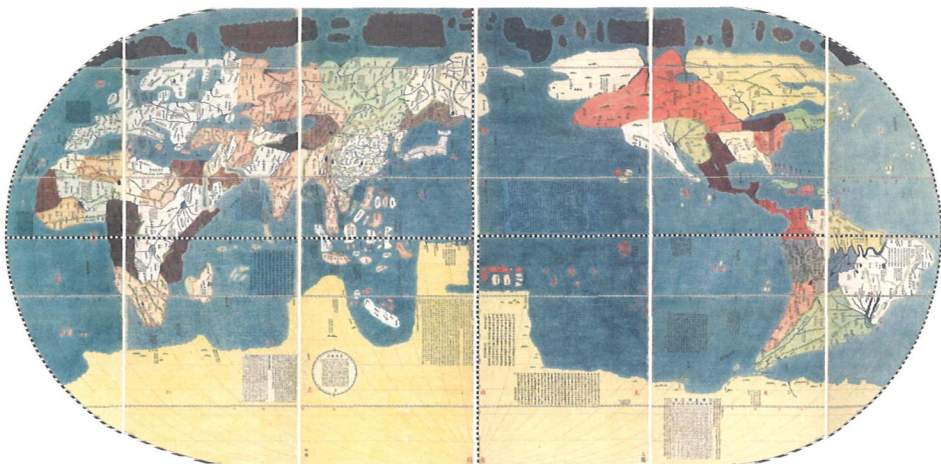
Q 明代後期の中国の社会・経済・文化は、世界の商業の活発
化とどのように関係していたのだろうか。

国際商業の活発化は、中国国内の商工業の発展をうながした。この時
期に綿織物や生糸などの家内制手工業が発展した長江下流域では、人口
に比べて穀物が不足するようになり、長江中流域の湖広(現在の湖北・
湖南省)が新たな穀倉地帯として成長した^④。江西省の景德鎮に代表され
る陶磁器も生産をのぼし、生糸とともに、ヨーロッパやアメリカ大陸に
まで販路を広げた。

海外からの銀の流入により、中国では銀が主要な貨幣となり、16世紀
には、各種の税や労役を銀に一本化して納入する一条鞭法の改革が実施
された。しかし、軍事費の増大により重税を課された農民の生活は苦し
く、商工業発展の利益はもっぱら商人や官僚の手に流れ込んだ。山西商
人や徽州(新安)商人など、明の政府と結びついて塩の専売などで利益を
得た特権商人は、全国的に活動して巨大な富を築いた。また、大都市に
は、同郷出身者や同業者の互助・親睦をはかるための会館や公所もつく
られた。富裕な商人や郷紳^⑤は都市に居住し、庭園の建設や骨董の収集
など文化生活を楽しんだ。

商業の発展とともに、木版印刷による書物の出版も急増し、科擧の参

「坤輿万国全図」 楕円のなかに世界の地図が描かれ、漢文で説明がついている。1602年に北京で刊行されたのち、日本にも輸入され、これをもとに多数の世界地図がつくられた。図は江戸時代に仙台藩が模写したもの。



考書や小説、商業・技術関係の実用書などが多数出版されて、書物の購買層は広がった。『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』などの小説が普及し、講談や芝居も都市を中心に庶民の人気を得た。儒学のなかでは、16世紀初めに王守仁(王陽明)が、無学な庶民や子どもでも本来その心のなかに真正の道徳をもっていると主張し、外面的な知識や修養に頼る当時の朱子学の傾向を批判して、学者のみならず庶民のあいだにも広い支持を得た(陽明学)。



「坤輿万国全図」

明末には、科学技術への関心も高まった。『本草綱目』(李時珍著)、『農政全書』(徐光啓編)、『天工開物』(宋応星著)などの科学技術書がつくられ、

日本など東アジア諸国にも影響を与えた。当時の科学技術の発展には、16世紀半ば以降東アジアに來航したキリスト教宣教師の活動も重要な役割を果たした。日本でのキリスト教普及の基礎を築いたイエズス会のザビエルは、中国布教をめざしたが実現せず、その後、16世紀末以降に



マテオ＝リッチ(左)と徐光啓
徐光啓はリッチに学び、西洋学術の導入につとめた。彼は『崇禎曆書』や『幾何原本』の編纂にも参加している。

マテオ＝リッチらが中国に入って布教をおこなった。日本ではキリスト教が庶民層にまで広まったが、中国では、ヨーロッパの科学技術に関心をもつ士大夫層がキリスト教を受け入れた。リッチが作製した「坤輿万国全図」は、中国に新しい地理知識を広め、日本などにも伝えられた。また、西洋暦法による『崇禎曆書』や、『ユークリッド幾何学』の翻訳である『幾何原本』も刊行された。アダム＝シャルが完成した。

東南アジアの動向

Q この時期、東南アジアで台頭した新興勢力には、どのような共通点があるだろうか。

16世紀の東南アジアでは、ポルトガルに占領されたマラッカのように



「南蛮屏風」 16世紀後半から17世紀初めにかけて日本で作製された多数の南蛮屏風には、ポルトガルなどの船や商人・宣教師の姿が描かれている。

ヨーロッパ勢力の支配下に入った地域もあった。ポルトガルに続いて東南アジアに進出したスペインは、フィリピンを占領し、マニラを拠点として交易をおこなった。スペイン支配下のアメリカ大陸で採掘された銀

がマニラへと運ばれ、おもに中国に流入した。アジアからは中国の生糸や陶磁器、南アジア産綿布などがマニラ経由でアメリカ大陸に運ばれた。

一方、同時期の東南アジアには、交易の利益やヨーロッパから伝来した新式の火器など、外国との交流を利用して、強力な国家を建設した国々もあった。諸島部では、アチェ王国やマタラム王国などのイスラーム国家が、香辛料などの交易の利益を基盤に成長した。インドシナ半島

では、タイのアユタヤ朝やビルマのタウングー朝など上座部仏教を奉ずる国々が、米や鹿皮の輸出で繁栄した。

ジャワ島西部のバンテン王国、スマトラ島北部のアチェ王国、ジャワ島中・東部のマタラム王国が交易で発展した。

①日本では文禄・慶長の役、朝鮮では壬辰・丁酉倭乱という。

朝鮮の亀船(亀甲船) 李舜臣の率いる朝鮮の水軍は、船体上面を亀の甲のようにおった亀船を用いて、日本軍に打撃を与えたといわれる。



東アジアの新興勢力

Q この時期に東アジアに生まれた新興勢力のあいだには、どのような共通点があるだろうか。

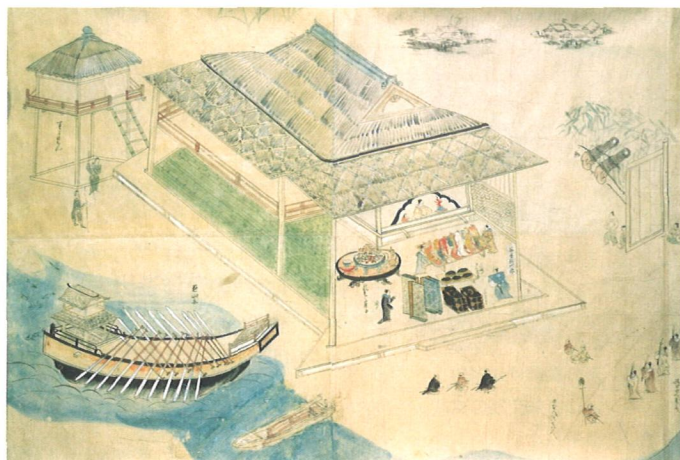
日本では、織田信長・豊臣秀吉が南蛮貿易の利益を得つつ、新式の鉄砲などの火器を活用して日本の統一を進めた。豊臣秀吉はさらに領土の

拡大をめざして朝鮮に侵攻した①。しかし、明の援軍や朝鮮の李舜臣が率いた水軍、民間の義兵などの抵抗を受け、秀吉の死とともに

日本軍は撤退した。秀吉の死後、実権を握って江戸幕府を開いた徳川家康は、東南アジアに朱印船を派遣し、香木・鹿皮などの東南アジア物産や、中国の生糸・絹織物を輸入した。

東南アジアの各地では、中国の貿易商人による華人街に加えて、日本人による日本町もつくられた。

日本の銀と中国の生糸の交易は大きな利益をもたらすものであったが、倭寇を警戒する明は、海禁をゆるめたのちも日中間の直接交易を許さなかった。そのため、日中の密貿易商人に加えて、マカオ^②を拠点としたポルトガルや台湾に拠点を築いたオランダなど、ヨーロッパ勢力が中継貿易の利益を得ようと争った。しかし江戸幕府は、幕府の統治の基礎を固めるため、キリスト教禁止や交易統制を強化し、1630年代に日本人の海外渡航やポルトガル人の来航を禁じた(いわゆる「鎖国」^③)。



朱印船貿易 中部ベトナムの交趾(広南)国で、国王と会見し、貢物を献上する日本の朱印船貿易商人。交趾は、朱印船のおもな渡航先の1つであった。図は「茶屋船交趾渡航貿易絵巻」(部分)。

一方、中国の東北地方には、農牧・狩猟生活を営む女真(ジュシェン、のち満洲^④と改称)が住み、明の支配を受けていたが、この地方でも薬用人参や毛皮の交易が盛んになり、その利益をめぐる女真諸集団の争いが激化した。そのなかで16世紀末、ヌルハチ(太祖)が女真の統一に成功し、1616年に建国して国号を金(後金)^⑤とした。ヌルハチは、八旗^⑥の編制や満洲文字の制作など、独自の国家建設を進め、明との戦争を開始した。第2代のホンタイジ(太宗)は、内モンゴル^⑦のチャハルを従え、支配下の満洲人・漢人・モンゴル人に推戴されて36年に皇帝と称し、国号を清と定めた。

北虜南倭に続き、朝鮮半島や東北地方での戦争によって、明の財政難は深刻化した。万暦帝時代の初期、実権を握った張居正は中央集権の強化による財政の立て直しを試みたが、かえって地方出身の官僚たちの反発をまねき、東林派^⑧と非東林派との党争によって政治は混乱した。重税と飢饉のために各地で農民反乱がおこり、明は李自成の反乱軍に北京を占領されて滅亡した(1644年)。

②19世紀末に正式にポルトガル植民地となったが、1999年に中国に返還された。

③「鎖国」の語は、19世紀初め、ヨーロッパ諸国の通商要求が強まるなかで、1630年代以来の対外関係統制政策を指すものとして用いられるようになった。

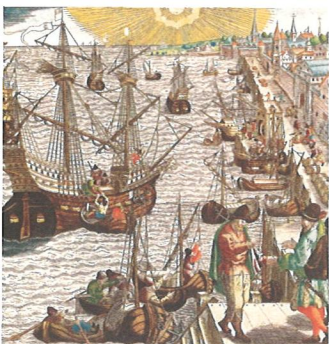
④満洲(マンジュ)とは、女真人がみずから名づけた民族名である。また、のちに満洲人発祥の地である中国東北地方は「マンチュリア(満洲)」と呼ばれるようになった。

⑤12世紀建国の金と区別して後金と呼ばれる。また、満洲語の国号はアイシン(金の意)とされた。

⑥満洲人の血縁・地縁集団を再編制した軍事・行政組織で、8つの軍団が、それぞれ色と縁どりの有無で区別される旗を標識とした。

⑦モンゴル高原のうち、ゴビ砂漠の北側を外モンゴル、南側を内モンゴルという。

⑧江蘇省無錫の東林書院の関係者が政府批判の中心になったので、このように呼ばれた。



リスボン港の風景(1562年)
リスボン港は海洋交易の玄関口として繁栄した。

ポルトガルの首都リスボンは、
世界商業の中心として繁栄した。

①とりわけ、15世紀半ばにビザンツ帝国がオスマン帝国に滅ぼされたため、遠方の未知の地にいるとされたキリスト教徒と連携してイスラーム勢力を挟撃する構想は刺激的であった。また、『世界の記述』(『東方見聞録』)(→p.147)に記された「黄金の国」のイメージもヨーロッパ人の意欲をかき立てた。

②ヨーロッパ人が海洋に進出した15世紀から16世紀は、大航海時代とも呼ばれる。



ゴアの大聖堂 ポルトガルは16世紀初めにインド西部のゴアを占領し、すぐに大聖堂を建てた。ポルトガルの支配は1961年まで約450年間続いた。

2 ヨーロッパの海洋進出とアメリカ大陸の変容

Q ヨーロッパの海洋進出は、諸地域にどのような影響を与えたのだろうか。

ヨーロッパの海洋進出

Q ヨーロッパの人々は、なぜ遠洋に乗り出していたのだろうか。

13～14世紀の地中海では、イタリア諸都市の商人が活発に交易をおこなっていた。^{らんしんばん}羅針盤^{はんせん}と新型の帆船が実用化され、天文学や地理学の知識も増えたため、イタリア商人は地中海からジブラルタル海峡を抜けてフランドル地方と直接交易するまでに活動の場を広げた。交易品のうち、とくにアジア産の^{こうしんりょう}香辛料^{ちゅうほう}は重宝されたが、東地中海に勢力を拡大していたオスマン帝国を経由して輸入されたため高価であった。このため^{こうえき}香辛料^{→p.120}を直接手に入れる交易路の開拓は、魅力的な事業となった。

同じ頃、イベリア半島では、イスラーム教徒に対する中世以来の国土回復運動(レコンキスタ)が進行しており、大西洋への出口がキリスト教諸国によって確保されるとともに、領土のいっそうの拡大とキリスト教^{ふきょう}布教の熱意が高まっていた①。このため15～16世紀のヨーロッパ諸国は、ポルトガル・スペインを先頭に大西洋に乗り出して、アジア航路を開拓し、また南北アメリカ大陸に到達してこの地を征服することになった。

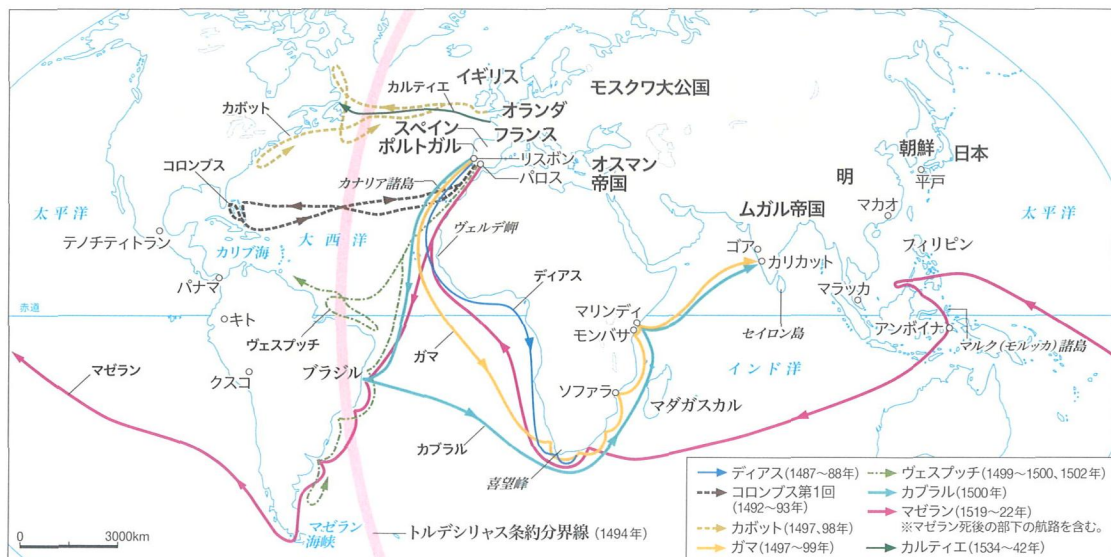
ヨーロッパのアジア参入

Q ヨーロッパの人々の進出は、アジアに何をもたらしたのだろうか。

ポルトガルは、15世紀に入るとムスリム支配下の北アフリカに進出し、また「航海王子」とも呼ばれた^{Henrique}エンリケ^{1391～1460}や^{ジョアン2世}ジョアン2世^{→p.131}のもとでアフリカ西岸の探検をおこない、さらに、アジア航路の開拓を目的に南大西洋へ探検隊を派遣した。1488年、^{Bartolomeu Dias}バルトロメウ^{1450頃～1500}ディアスが喜望峰に到達して、アフリカ南端を確認した。98年には^{Vasco da Gama}ヴァスコ＝ダ＝ガマ^{1469頃～1524}がインドに到達し、ヨーロッパとインド^{なんたん}西岸の^{カリカット}カリカット^{→p.131}に到達した②。

ポルトガルはインドの^{ゴア}ゴアを根拠地とし、東南アジアにも進出して香辛料などのアジア物産をもち帰ったが、かわりに輸出する商品をもたなかったため、アジア内での中継貿易にも乗り

香辛料の主産地である。モルッカ(マルク)諸島に到達した。



出した。彼らは現地で交易網を発達させていたムスリム商人を火器の力で圧倒しつつ、各地に要塞や商館を築いて、16世紀前半にインド洋で活
 発な交易をおこなった。さらに同世紀後半から東アジアにも進出して、
 1557年にマカオの居住権を得て中国との交易の拠点としたほか、平戸を
 拠点に日本とも交易した。ポルトガルの交易網はアジアのほぼ全域にお
 よび、その拠点にはカトリックの教会も設置され、レコンキスタとそれ
 に続くカトリック改革の勢いに乗って布教もおこなわれた。

ヨーロッパ人による航海と探検
 トルデシリャス条約(1494年)は、ヨーロッパの海洋進出をリードしたスペインとポルトガルがたがいの勢力圏を定めるために結んだもので、ローマ教皇によって追認された。

③コロンブスは、トスカネリ
 の地球球体説(→p.177)をもとに、この計画を立てた。

16世紀初めにヨーロッパでつくられた世界地図。アメリカ(図左端)をはじめて独立した大陸として表している。ドイツ人ヴァルトゼーミュラーによって作製された。

ヨーロッパのアメリカ「発見」と征服

▶ 中南米の先住民が短期間でスペイン人に征服されたのは、なぜだろうか。

ポルトガルに遅れをとったスペインは、大西洋を横断してアジアに向かうコロンブスの計画を後援し、彼の船団は1492年にカリブ海の島にスペイン女王のイサベルの後援でサンサバルド島に到着した。彼はその後、今日のアメリカ大陸にも上陸したが、そこを「インド」と信じ、その住民をインディオ(インディアン)と呼んだ。この「発見」に刺激されて、各国の探検隊が同地に派遣された。アメリカゴ・ヴェスプッチは、ここがアジアではなく未知の「新世界」であるととなえ、アメリカの呼び名の起源となった。また、イギリス王の支援を受けたカボットは北米大陸を探検





アステカ王国の滅亡 コルテスは首都テノチティランを破壊し、そこにスペイン人の町を建設した。これが現在のメキシコシティの始まりである。

① これら一連の探検事業は、のちに中南米でスペイン・ポルトガルが、北米ではイギリス・フランスがその地の支配権を主張する根拠とされた。

② マゼランの船隊が到着したことを足がかりに、スペインは、16世紀後半からフィリピンの植民地化を進めた。

③ スペイン人がもちこんだ疫病も、先住民に大きな打撃を与えた。なお、北米大陸に入植したイギリス人・フランス人・オランダ人も、武力で先住民から土地を奪った。

④ 高い致死率をもった疫病の1つであるマラリアに対して、黒人は抵抗力が強かった。

Q▶ これはドミニコ会修道士のラス=カサス(1474/84~1566)が、エンコミエンダ制を批判した文章の一部である。こうした蛮行がなぜ可能となったのだろうか。

し、フランス人カルティエはカナダに到達した。一方、ポルトガル人**カブラル**はインドに向かう途中でブラジルに漂着した①。さらに**バルボア**は南北アメリカが地続きであることを確認し、ヨーロッパ人としてはじめて太平洋にも到達した。他方でスペインはアジア航路の探索も続け、**マゼラン**の計画を支援した結果、彼の船隊は南アメリカ南端を経て、初の世界一周を達成した(1522年)②。

コロンブス以降に中南米へ上陸したスペイン人の「征服者」(コンキスタドール)たちは、先住民の文明の豊かな財宝を知ると、その略奪に熱中した。「征服者」は少人数だったが、火器や騎兵を駆使し、また先住民の被支配部族の反乱を煽って、**コルテス**がメキシコでアステカ王国を、つづいて**ピザロ**がペルーでインカ帝国を滅ぼした③。

財宝を奪いつくすと、「征服者」たちは王室の認可を受けて、キリスト教布教の義務と引きかえに先住民を使役し、彼らに貢納・賦役を課した(**エンコミエンダ制**)。さらに、**ポトシ**(現在のボリビア)やメキシコで銀山が発見されると、採掘のために先住民を強制労働に用いることも認められた。こうした過酷な支配やヨーロッパからもちこまれた疫病によって先住民が激減すると、王室はエンコミエンダ制を廃止し、入植者に土地を与えて農業開発を進めた。その労働力として、アフリカから**黒人**が**奴隷**として運び込まれた④。また、ポルトガル領のブラジルでは、先住民の搾取よりも入植と土地の開発が重視されたが、ここにも多数の黒人

ラス=カサス『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(1552年)

彼ら[スペイン人植民者]のその有害きあまりない盲目ぶりは度を越し、ついに彼らはインディオ向けの降伏勧告状(レケリミエント)を作成することを思いつき、実際にそれを作成し、……読んで聞かせることを命じた。降伏勧告状とは、インディオに対して、キリストの信仰を受け入れ、カスティーリャ国王に臣従するよう勧告し、もし言うとおりにしなければ、情け容赦ない戦争を仕掛けられ、殺されたり捕えられたりする云々、と言い聞かせる文書であった。……そのようにして、スペイン人は、彼らが征服(コンキスタ)と呼ぶ活動をおこないつづけた。征服とは、残忍な無法者たちがおこなう暴力的な侵略であり、それは神の法のみならず、あらゆる人定の法にも背馳し、……劣悪な所業である。

(染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』)

奴隷が運び込まれた⑤。

このようにして、中南米はスペイン・ポルトガルの広大な植民地となり、そこでは副王(総督)をはじめとする本国から派遣された官僚と、「征服者」にかわって新たに入植し、黒人奴隷を用いた大農園(プランテーション)を開発・経営する白人地主の2者を支配集団とする社会が確立されていった。また、支配された先住民・黒人のあいだにもカトリックの信仰が広

まった。なおスペインは、フィリピンのマニラを拠点に、ガレオン船を用いて太平洋を横断する交易ルートを開き、これによってメキシコの銀と中国物産が交易されることになった。

「世界の一体化」と大西洋世界の形成

Q 16世紀に一体化が始まった「世界」は、どのような性格をもっていたのだろうか。

ヨーロッパ人が海洋に進出したことで、世界の諸地域が交易を通じて結びつけられ、「世界の一体化」が始まった。ただし、その影響は、ヨーロッパ・アジア・中南米で異なっていた。ヨーロッパでは、国際商業が経済の柱の1つとなり、また、その中心は地中海沿岸から大西洋沿岸地域に移動した(商業革命)。アジアでは、ヨーロッパ人は既存の交易網に参入して利益をあげ、さらに大量の銀と引きかえにアジア物産をもち帰った。彼らはヨーロッパとアジアの経済を密接に結びつけたが、アジアの政治秩序や文化にただちに大きな影響を与えたわけではなかった⑥。

これに対して中南米では、ヨーロッパ人は先住民の文明を滅ぼしたうえに、様々な動植物・病原体をもちこんだ。さらに自分たちが入植するとともに黒人奴隷も運び込み、またキリスト教を広めるなど、現地の社会を根本的にかえてしまった。その一方で、中南米から様々な農作物がもちこまれてヨーロッパ社会に大きな影響をおよぼし⑦、銀や砂糖などの中南米の産物がヨーロッパの産物と大規模に交易される関係も始まった。こうして、一体化しつつあった世界の一角に「大西洋世界」が出現し、ヨーロッパと南北アメリカ大陸は、のちに北アメリカで植民地が発展するにともなって、結びつきの度合いをいっそう強めていった。



マニラとメキシコのアカプルコを結ぶガレオン船が描かれた地図(1589年) 1565年にメキシコからフィリピンへの太平洋航路が発見され、大型帆船のガレオン船がこの航路に使われた。この交易は、1815年まで続いた。

⑤西インド諸島でも、17世紀にスペイン・イギリス・フランス・オランダなどが黒人奴隷を用いた大農園を築き、砂糖やコーヒーなどを大規模に生産した。

⑥この一方で、ヨーロッパ人がアジアと中南米を結びつけたため、アジアにも中南米の農作物がもちこまれ、また中国の絹織物や陶磁器などが中南米に送られた。

⑦ジャガイモ・サツマイモ・トウガラシ・インゲン豆・トマト・ピーナッツ・トウモロコシ・タバコ・カボチャ・カカオなどがヨーロッパに根づいた。逆に、サトウキビやコーヒーなどが「新大陸」にもちこまれた。また、梅毒などの疫病がヨーロッパおよびアジアに伝わった。